

パイナップルの「笑い」と「批判」

——移民開拓集落における方法としての「へんなパイナップル」——

立教大学大学院 廣本 由香

1. 「笑い」からみえる地域農業

本報告の目的は、沖縄県石垣市名蔵地区で生果のパイナップル（以下、パイナップル）を生産・出荷する平安名貞市氏が展開する「へんなパイナップル」を事例に取り上げ、方法としての「笑い」を明らかにする。石垣島において生果のパイナップルが本格的に生産され始めたのは、ここ 2、30 年である。1980 年代以降における WTO 農業交渉の結果を受けて実施された 1991 年のパイナップル缶詰の自由化、これに続く島内の缶詰工場の閉鎖まで、パイナップルは缶詰の「原料」として工場に卸されていたからである。パイナップル缶詰工場の閉鎖で、多くのパイナップル生産者が他の作物に転化した。こうした危機的な状況で、缶詰加工用ではなく生果としてパイナップルを生産し始めたのが平安名氏である。本報告で注目する「へんなパイナップル」は、モノカルチャー的な農業の構造的問題を表出させる「ボケ」であり、その「しかけ」によって沖縄農業の制度や文化、価値を部分的に揺さぶりうる試みである。本報告では、「笑い」によって照射される地域農業の生産者運動的展開を考えていくことにしたい。

2. 石垣市名蔵地区とパイナップル生産

石垣市名蔵地区は石垣島の中央部に位置し、沖縄最高峰の於茂登岳を中心とする山岳地帯の南側に広がる農村地帯である。名蔵地区は、戦前期までマラリアの被害による廃村や強制移住、さらには県外からの製糖プランテーションの進出など過酷な歴史を経ている。1930 年代以降は台湾入植者によってパイナップル缶詰生産を目的に開墾が進められた土地である。戦後は、宮古島や沖縄本島などからの「自由移民」が、旧大日本製糖（現・石垣島製糖）の社有地を借り受け、サトウキビやパイナップルを生産してきた。こうした移民開拓集落の名蔵地区に、宮古島から裸一貫で渡り、旧大日本製糖の「企業城下町」とも呼べる地区で、サトウキビではなくパイナップルの生産を主軸としたのが平安名氏の父親である。本報告では、父親が苦労して拓けた農地を引き継ぎ、パイナップルの生産・出荷組合を組織する平安名氏の「へんなパイナップル」の諸実践を事例に取り上げる。

3. 方法としての「へんなパイナップル」

平安名氏は、自らが生産・出荷する商品に「へんなパイナップル」という商品名をつける。これは、^{ヘイアンナ}平安名が沖縄口では「ヘンナ」と読まれること、さらにはユニークを意味した「変な」という言葉に掛けられている。自称「へんなおじさん」である。このような新奇な表現は、受け手（卸売業者・流通業者・消費者など）をクスッと笑わせる。平安名氏にとって、「へんなパイナップル」は受け手に対する「ボケ」であると同時に、受け手に適切な「ツッコミ」を入れさせるための「しかけ」である。「へんなパイナップル」は、「食べた人にはわかる」というような質的な妥協を許さない生産者としての自信の表れでありながら、実際には受け手に「へんな」商品とは指摘されないための自己規律的な態度でもある。「へんなパイナップル」は、「甘えた」地域農業に対する批判的視線として向けられる。

参考文献

太田省一, 2013, 『社会は笑う・増補版——ボケとツッコミの人間関係』青弓社。